

酒田市公益研修センター多目的ホール／東北公益文科大学酒田・鶴岡キャンパス

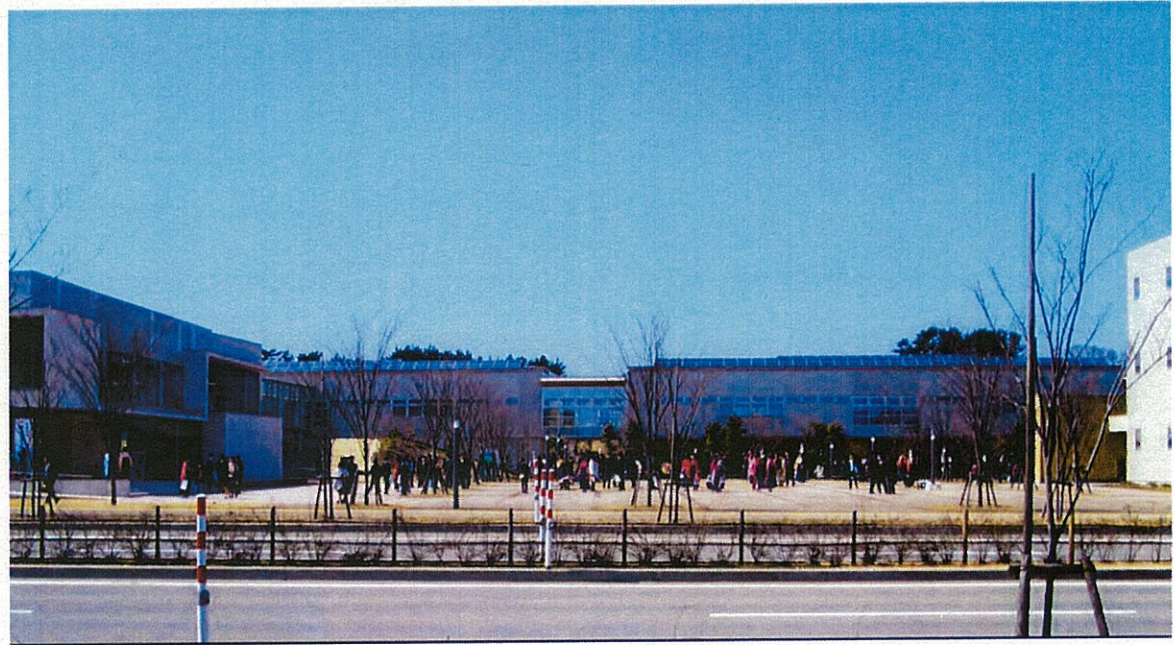
池田靖史/IKDS+日本設計+慶応大学池田靖史研究室

「大学づくりはまちづくり」のかけ声のもと、塀も門も無い大学通りの街並を形成した東北公益文科大学は酒田（学部）と鶴岡（大学院、研究所）に2つのキャンパスをもち、双方ともに、地域活性化をテーマに公共文化建築が集積する市街地を一体化したユニークなアーバンデザイン事例としてこれまでも様々な評価をいただきました。今年3月、開学から5年を経て酒田キャンパスの一角に酒田市が講演会やシンポジウム、研修会や発表会を主な用途にした公益研修センター多目的ホールを完成させ、市民の生涯学習活動の支援とともに大学との交流拠点を作り出しました。大学にとっても卒業式や入学式などの重要な行事を行う象徴的な講堂として利用される予定です。1998年に庄内地域への大学基本構想を慶応大学SFC研究所の委託研究としてかかわって以来8年、ホールの完成でキャンパス計画も当初の目標をほぼ達成しましたので、あらためて新しく完成したにホールと共にプロジェクトの全体をご紹介します。



東北公益文科大学の設立経緯

山形県には最上川の流域にそって内陸の地域から日本海に面した海岸まで地理的、歴史的な特色を持つ様々な地域があります。そのひとつ庄内平野地域に大学を設立して人材を育成したいという思いは数十年にわたる地元の思いだったと聞いています。山形県が地元市町村と広域連携組織を結成して公設民営方式で大学設立を本格的に計画し始めた1998年に大学運営のノウハウを現在東北公益文科大学の学長を勤める小松隆二教授や都市計画の伊藤滋教授ら慶応義塾のスタッフに相談しました。その中から「大学づくりはまちづくり」というコンセプトを地域とともに作り、地域とともに歩む大学設立の基本理念として掲げるようになっていきました。ケンブリッジの大学街などのように大学が閉鎖的な環境ではなく街と一体化している例が日本の大学ではあまりありません。しかしこの大学では政策や文化などから「公益」という社会理念を考える学問と教育を提唱し、その施設もキャンパスタウンとしての地域共有の社会インフラになるべきであるとされたのです。庄内地域には2つの全く異なる特色のある歴史を持つ同規模の都市があります。日本海に面する酒田市は最上川河口の重要な港として古くから商業都市として栄え、藤沢周平の時代小説の舞台である鶴岡市は日本の城下町の代名詞としてその存在を知られています。大学施設もその地域性を考慮して双方の街にキャンパスを持つことになりました。学部を中心とした本キャンパスを酒田市に、そして慶応大学と提携を結びその研究所と東北公益文科大学の大学院が鶴岡市のキャンパスにおかれました。



酒田キャンパス中央広場



鶴岡キャンパス中央広場

酒田キャンパスのマスタープラン

学部の施設を中心とした酒田キャンパスはその敷地設定が重要な意義を持っていました。大学用地を適切に確保する事で周辺地域をキャンパスとともに都市デザイン的に再構成し統合することが意図されたからです。東北公益文科大学酒田キャンパスの周辺には土門拳記念美術館や、酒田市国体記念体育館、酒田市美術館などの名建築が公共文化施設として近接していたにもかかわらず、それらは都市デザイン的に結びつけられることなく砂丘を利用した果物畑と防風林の中に点在していました。東北公益文科大学施設はその隙間を埋めるように計画し、大学の機能と既存の施設との連携に配慮したゾーニングをおこなうことで、周辺の既存施設も含んだ全体が大きなキャンパスタウンとして再組織化されることをねらったのです。その最も明解な手法として幹線道路として整備を予定されていた一般公道（県道宮浦坂野辺新田線）を挟んでその両側に位置する計画とあえてするとともに、県道自体をキャンパスタウンのデザインとして一体化し、ケヤキ並木のプロムナード「大学通り」とすることにしました。県道や市道などの主体の違う開発に一貫性を持たせるためキャンパスマスタープランナー制度の下に、基本設計以降は株式会社日本設計が施設設計に参加しました。



こうして地域に溶け込むキャンパスを目指してその周囲との境界を消す事がマスタープランの一つの理念になりました。どこにも門や塀を設けず、特に「大学通り」に面する部分は舗装材や街路樹配置など細部まで調整する事で境界を意識させないようデザインしています。大学施設はプロムナードに面して街並を形成するように中小規模の単位に分解して間隔を空けた分棟配置にし、背後になるキャンパスの西側斜面は防風林を開放した「遊心の森」の景観として意識させるために確保されました。市民は大学敷地の内外を全く意識しないでこれら建築物の間を通り抜けて周辺施設全体を回遊することができるようになり、天気がよければ観光客が周辺を散策している姿を目にする事が多くなりました。また同時にこの計画では大学施設の様々な部分が市民と共同利用することが目標にされました、そこで建物の配置計画や外観などを通じてさらに地域との一体化を深め、市民による大学施設の利用を促進することも意図しました。その第一の方法として「大学通り」に直接に面して配置した市民との共同利用施設を内部の様子がよく見える空間とする事で大学のにぎわいを市民に対して視覚的にアピールしています。2001年に食堂がオープンすると、子供連れからお年寄りまで実際に多くの市民が常時混在しており、メディアセンターではこの5年間の利用実績で図書貸出数1/3程度が市民とまできています。



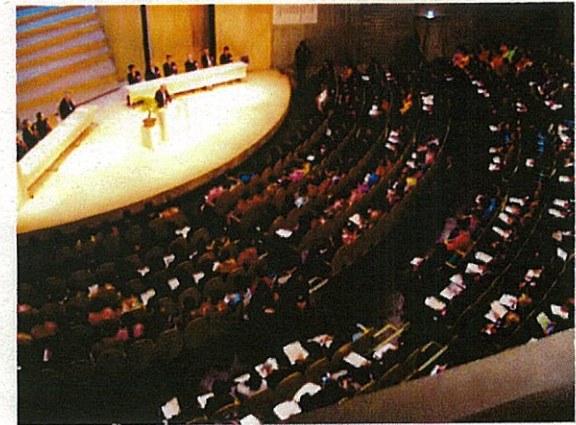
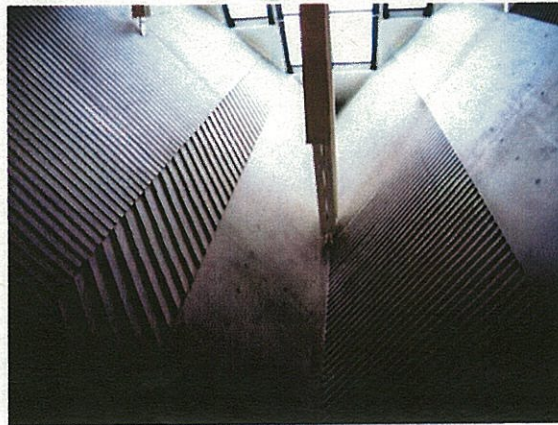
酒田市公益研修センター多目的ホール 設置の目的

巨大な建築物を避けて、低く抑え、小規模に分節されたボリュームによって街並を構成するよう構想された校舎の大部分は2001年の開学にあわせて完成しました。しかし講堂棟として構想されたキャンパスの一番南側の建物は第二次工事としてとして建設が待たれていました。これは開学後に起きるであろうと予測されていた様々な施設需要などの変化に対応するための布石でもあったのですが、開学後の市民利用の成功をうけ、結果として酒田市が公益研修センター多目的ホールを建設することを決め、この講堂としての機能も受け持ちつつ市民が大学の連携と交流の中心的な拠点となる生涯学習施設としたのです。つまり今度は市の施設でありながら東北公益大学酒田キャンパスの中に位置し、公益学という新時代の学問を庄内の自然と文化で育み世界へ発信していこうとする雄大な理念を共に創る地域の市民が集う場所であることがその目的とされています。



円弧配列のレクチャーホール

536席のホールは多目的ホールと呼ばれていますが、既にキャンパスや酒田市に存在する施設との機能的な補完を意識し、講演やシンポジウムを中心としたレクチャーホールとしての機能をその中心的な機能と捉えています。ここではギリシャ・ローマの円形劇場のように円弧配列の段床座席が舞台を取り囲む形式にこだわる事で、場の持つ雰囲気やアクティビティを自然に誘発する事を強く意図しました。電子のコミュニケーションの時代にもかかわらず、様々な目的での講演会や研修集会は増えていると言われていました。大学などでもマルチメディアな授業の方が一般的になり、インターネットを介した遠隔講義なども増えてきました。講義や講演の内容を理解するだけならビデオでも本でもわからないのかもしれませんが、それでも人が集まる場所には特別な力があるようです。観衆のいない競技場の試合が根本的な魅力を失ってしまうように、その場所その時間に居合わせた観衆の間での一体感こそが、現代においても集会場の建築空間でなければ提供できない意義となって来ているように思えます。だからこそ観衆同士が相互の反応を視覚的に確認しやすい位置関係にある円弧配列段床客席が重要だったので。演劇ホール的な利用の制限や、映写スクリーンを見る角度差が大きくなる事などを考慮に入れても、集会場の原点に立ち戻って人間が集いお互いに反響しあう客席どうしの一体感を重要視したレクチャーホールは大学と市民が共に学ぶ場所を提供する正しい手法であると考えました。舞台上部のトップライトから自然光を取り入れる工夫も象徴性をつくり出します。



アクティビティが溢れ出すホール

この建築の最大の特徴は客席背後の壁面がほとんどすべて大ガラス面となって、L字型にホールを取り囲む2階通路に連続している点にあります。通路を行き来する人たちにとってホールはまるで中庭のように様子を目にする事が出来る空間になっています。ホールの音は必要に応じて録音スタジオのように大型防音2重ガラスで全く外に漏れないようにする事が可能です。通路の音も全くホールへ聞こえないために舞台にいる講演者はそれほどこの部分は気にならないようです。大きなガラス面は細い幅の吹き抜けで2階床より低い位置にあり、ホールの内部と2階の通路部分には連続した内装のデザインを強く意識しています。もちろん必要に応じて内部への視線を遮るスクリーンをおろす事で通常のホールと同じように暗転できるモードに変える事も可能ですが、逆に通路側の採光もシャッターと電動ロールスクリーンで制御して、むしろホールと一体化するモードも考案しました。それは、このホールが入学式や卒業式などの建物全体を利用する大きなイベントで収容人数を超えて対応する必要があり、ガラス越しにホール内部と一体的に連続する通路部分に仮設席を設けて合計680席程度に拡張できる形式にするためです。



通路まで並べたときの座席は普段中研修室で使っているスタッキングチェアが使われますが、空になった2階の中研修室は内外が反転してホワイエ的空間にして、例えば内部で行われている催し物の関連展示空間などにも活用する事を考えました。

2階中研修室の北側には大きなガラス引き戸がありここを開く事でロビー側に連続する空間に変化します。実際に使われている様子を観察していると、通路席には幼児を連れた方や遅れてこられた方などが気軽に座る事ができ、自分たちの活動交流イベントが主体である空間としては適しているように思いました。南側の駐車場から大学校舎への通り道にもなるこの通路の少し広めの空間には、普段はラウンジ的な椅子を若干配置する事で偶然通りかかった時の覗き見をあえて奨励するような空間であってほしいと考えています。

